

## 「ようこそ」

主任司祭 晴佐久昌英

12年前、ぼくがこの教会へ赴任したのは、実は当時の主任司祭と信徒のおかげである。

そのころぼくは青少年担当司祭であり、「東京教区青年ネットワーク」なる構想を胸に、その活動拠点となる事務所を置かせてくれる教会を探して都内の教会を訪ね歩いていた。

とはいえ、自分の教会の青年のケアにすら窮しているというのに、よその青年活動グループを抱え込むほどの余裕と度量のある教会など、そうそうあるものではない。いくつかの教会から体よく断られた末にたどり着いたのが、この高円寺教会だったのである。

パイプをくわえた主任司祭はこちらの話を黙って聞き、「んー」としばらく考えてから、ぼくをヴィアンネホールに案内して扉を開け、こう言った。「このホールの隅を区切って使えばいい。教会委員会にかけてみよう」。そしてつけ加えた。「あんたがここに来るならね」。

それでぼくはここに来たのである。今回の出戻りにしても、「前もいたんだからやりやすいでしょう」と言った司教の言葉からすれば、結局はその時の「んー」の延長線上にある。

引っ越して来た日、なつかしきヴィアンネホールにたたずんで「ああ、ここで色々やったなあ」などとしみじみしながら、ふと思った。

「もしぼくだったら、受け入れたらどうか」

異質なものを受容するには、勇気がいる。それは面倒を引き受ける事であり、何かを犠牲にする事でもある。現にそれからの3年間、大勢の青年達が昼夜を問わず出入りし、頻繁にハメをはずしてトラブルを起こし、解放区さながらのにぎわいだったのだ。眉をひそめる信者もいたし、主任司祭も相当忍耐していたはずだ。

しかし、これだけは言っておきたい。あのとき、あの教会には、確かに「何か暖かいもの」があった。「ようこそ」と扉を開けるもてなしの心があった。そのもてなしを受けた者の当然の義務として、ぼくもまた「ようこそ」と扉を開けなければ、戻って来た意味がない。

もてなす教会にしよう。扉を開けて魂の解放区をつくりだそう。イエスから「ようこそ」と言われた日の喜びを今一度、新たにして。